

2014年3月29日 於神戸大学文学部学生ホール

2013年度若手研究者支援シンポジウム「災厄とトラウマ」報告レジュメ

●「記憶する・想起させるメディア」としてのマンガ/コミックス

雑賀忠宏（神戸大学 学術推進研究員）

e-mail: xika31@yahoo.co.jp

▼本報告の目的

- ・マンガ/コミックスというビジュアル・ナラティブのメディアにおける「記憶」表象
その諸相の検討

①「記憶するメディア」としてのマンガ/コミックス：

マンガ/コミックスのビジュアル・ナラティブにおける「記憶」（トラウマ等）のとりこみ

②「想起させるメディア」としてのマンガ/コミックス：

マンガ/コミックスにおけるビジュアル・ナラティブのなかの「記憶」表象と社会—文化的トラウマ（J.C.Alexander）あるいは集合的記憶との関わりあい

▼マンガ/コミックスというビジュアル・ナラティブの領域

- ・カトゥーン/カリカチュアといった領域との分節化
「連続的芸術 sequential art」（ウィル・アイズナー）としてのコミックス
→その連続性を支えるものとしての「コマ panel」の配置
「絵＝描線」・「言葉」・「コマ」という3つの視覚的要素に支えられた物語表現としてのマンガ/コミックス（夏目房之介ほか『別冊宝島 EX マンガの読み方』）

▼欧米圏コミックスにおける個人史としての「記憶」表象とそのテーマ化の流れ

- ・欧米圏コミックスにおける個人史テーマの勃興
アメリカン・コミックスにおける「アンダーグラウンド/オルタナティブ・コミックス」から「グラフィック・ノベル」への流れ（60年代～）
→①作品素材としての「日常」の発見（＝メインストリームとの差異化の手段）
②その描写を下支えするものとしての「個人史」的テーマのとりこみ
→ヨーロッパへの波及（90年代）
とりわけ「自伝」形式で描かれるコミックスの、ジャンルとしての確立

代表的な作品：

Justin Green, *Binky Brown Meets The Holy Virgin Mary* (1972)

Harvey Pekar, *American Splendor* (1976～)

Will Eisner, *A Contract With God* (1978)

Art Spiegelman, *MAUS* (1980～1991)

David B, *L'Ascension du Haut Mal* (1996～2002)

Marjane Satrapi, *Persepolis* (2000～2003)

Allison Bechdel, *Fun Home* (2006) ……など

▼コミックス表現の「記憶」表象における視覚的テキストと言語的テキストとの緊張関係

・Justin Green『Binky Brown Meets The Holy Virgin Mary』と Harvey Pekar『American Splendor』におけるビジュアル・ナラティブとしての表現の差異

『Binky Brown〜』: ダイナミックに変形する人体や事物 描線の可塑性の強調

視覚性の優位と共感性“easy to understand comic-book format”

『American Splendor』: 司会者のように読者へと語りかけ続けるピーカー自身

抑制された絵＝描線の可塑性、言葉の氾濫とその優位

→マンガ／コミックスという表現によってなされる「記憶」表象における、「絵」と「言語」の緊張関係の存在

→「自伝」コミックスをめぐる議論における、真正な「自己」を相対化し転覆するポテンシャルを含みこんだものとしてのコミックス的表現への注目

「auto-graphic」(Gillian Whitlock): アイデンティティをめぐる折衝の場としての視覚的テキストと言語的テキストとの関係性への注目 例としてのアリソン・ベクダル

『Fun Home』のテキストにおける言葉と絵との拮抗関係

「cartoon self」(Charles Hatfield): 語る主体としての自己と描かれる客体としての自己との乖離の局面 同一性を保ち理想化された語る主体＝作者に対する、〈他者〉としての「描かれた自己 cartoon self」 その前提となる描線の可塑性・不安定性

←→日本マンガの（洗練された）「わかりやすさ」

▼日本マンガの「大衆文化」化における心理描写技法の拡大とその基盤としての「コマ」

・日本マンガにおけるテーマの拡大と「記憶」の表象

「劇画」から青年マンガへ（60年代）→児童文化から大衆文化への拡大・転換

→テーマの拡大 社会的事件や世相のとりこみ

さいとう・たかをによる「劇画」の特徴付け: 「絵＝描線」の“リアリティ”の強調

辰巳ヨシヒロによる「劇画」の特徴付け: 「コマ割り」を活用した心理描写

(→70年代少女マンガにおけるコマの重層化と「内語」による〈世界観〉の表現可能性)

一方で、こうした「劇画」をメルクマールとするマンガの「大衆文化」化は、同時にこの「コマ割り」を基盤とする語りの構造を洗練させていくことによって、透明化させていくことにもなる →マンガの「わかりやすさ」という誤解

その延長線上にあるものとしての中沢啓治『はだしのゲン』に対する「反戦・反核マンガ」という評価

▼マンガ／コミックスにおける個人史と社会－文化的トラウマとの交錯、その困難

・ Art Spiegelman 『MAUS』におけるホロコーストの記憶と家族の記憶との融合

作者の父が語るホロコースト経験（過去）

+父との関係をめぐる作者自身の家族史（現在）

重層化された表現の使い分け（登場人物の「キャラクター化」の度合いの差異、絵＝描線のコントロール）

同じ作者による 911 を取り扱った 『In The Shadow of No Towers』(2002) との差異

個人史という切り口を欠いて社会－文化的トラウマをコミックスとして表象することの

困難

→911 に対するアメリカのコミックス作家たちの戸惑い：チャリティコミックス『911: Emergency Relief』収録作品 911 というトラウマをコミックス表現を介して個人史の水準へと回収していこうとする作品群 「表現への幻滅」と「癒やしとしてのコミックス」(小田切博『戦争はいかに「マンガ」を変えるか』、NTT 出版、2007)

・中沢啓治『はだしのゲン』(1973～)

中沢自身の被爆体験を下敷きとしたマンガ、という一般的理解 作者との連続性
一方で『週刊少年ジャンプ』連載という側面 娯楽読み物としての少年マンガ的表現技法の駆使

「黒い目をした被爆者」(吉村和真)と少年マンガ的身体をもった「ゲン」との同居
ビジュアル・ナラティブとしてのマンガ/コミックスのもつ虚構性へのある種の自覚
→3・11の経験を「キャラクター化された自己」を通じて語るエッセイマンガ的作品群
→自己のアイデンティティを描き出す日常的な表現として「マンガ・スタイル」を採用するニューヨークの高校生たち(マイケル・ビッツ『ニューヨークの高校生、マンガを描く』、岩波書店、2012)